

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03274

研究課題名(和文) 日本におけるインバウンド・ツーリズムの発展に関する地理学的研究

研究課題名(英文) Geographical study on the development of inbound tourism in Japan

研究代表者

呉羽 正昭 (KUREHA, Masaaki)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：50263918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本におけるインバウンド・ツーリズムをめぐる目的地(インバウンド・クラスター)の動態をフィールドワークを通じて実証的に明らかにするとともに、外国人観光者への調査を通じて彼らの行動特性を解明することであった。その結果、目的地と行動の多様化と複雑化が生じるとともに、目的地が多極化した階層化が進んでいることが示された。一方、一部のインバウンド・クラスターでは、外国人がインバウンド・ツーリズムに対応するための「イノベーション」をもたらしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study empirically clarifies the dynamics of destinations (inbound clusters) on inbound tourism in Japan through fieldwork and elucidates their behavioral characteristics through investigation into foreign tourists. As a result, diversification and complexity of the destination and action occurred, and it was shown that the destinations are multipolar and the stratification is progressing. On the other hand, some inbound clusters have revealed that foreigners are bringing "innovation" to accommodate inbound tourism.

研究分野：人文地理学

キーワード：インバウンド・ツーリズム インバウンド・クラスター 日本 フィールドワーク イノベーション
レジリエンス 観光行動 観光文化

1. 研究開始当初の背景

日本をめぐる国際観光については、アウトバウンド・ツーリズムが、インバウンド・ツーリズムを大きく上回ってきた。こうした不均衡を是正するために、「観光立国」を目指した日本政府によって、2003年から外国人誘致戦略の一環として「ビジット・ジャパン・キャンペーン」が推進されてきた。その結果、訪日外国人観光者数は、2000年の500万人弱から順調に増加してきた。2009年(リーマンショック、鳥インフルエンザ)と2011年(東日本大震災)に大幅な減少を示したが、2012年以降は、訪日外国人観光者数は順調に回復し、また増加している。

インバウンド・ツーリズムをめぐる近年の傾向として、上記の発展傾向に加えて、まず外国人観光者の国籍が多様化していることがあげられる。2000年代前半までは東アジア諸国とアメリカ合衆国が主であったが、2012年以降は、東南アジア諸国やヨーロッパ諸国からの観光者が増えている。同時に、外国人観光者の日本での観光行動が多様化ようになってきた。かつては、大都市の東京、著名な社寺が集積する京都、その他の名所・旧跡、温泉などを訪れる外国人の観光行動が主体であった。しかし、行動の多様化とともに「SIT (Special interest tourism)」の重要性も高まり、目的地の多様化が顕著になりつつある。これらがどのようなかたちで多様化しているのか、観光者の出発国・地域によって行動の多様化は関連するのか、国土の地域特性といかなる関係を有しているのかなどに関する実態把握が求められる。つまり、インバウンド・ツーリズムの発展に地域差がみられ、それゆえに地理学の立場からこの点を解明することが求められる。

日本国内において、インバウンド・ツーリズムの行動や目的地が多様化すると、国内の観光産業や観光地域は、そうした多様化に対応するために「イノベーション」を必要とする (Funck and Cooper 2012)。一方、外国人観光者の嗜好は出発国・地域によって異なっていることが予想され、その目的地には地域的偏りも出現する。それゆえ、イノベーションの発生は一部の地域や企業に限定され、そこに「インバウンド・クラスター」が形成される。たとえば、北海道倶知安町ニセコひらふ地区では、オーストラリアや香港からの観光者の増加にともなってリゾート景観が大きく変化した (Kureha 2014)。そこでは、外国人によってイノベーションがもたらされ、主として外国人が長期滞在するコンドミニアムやコテージが新規に大量に建設された。外国人観光者の行動が多様化するなかで、ある程度の訪問者規模を維持するように「イノベーション」を通じた努力が重要である。

ところが、上記のようにインバウンド・ツーリズムは、不況や災害といった何らかのイベントによって急激にその来訪規模が縮小する危険がある。これを最小限にとどめ、イ

ンバウンド・クラスターとして持続的に発展するためには、「レジリエンス」を高めることが必要である。レジリエンスとは、生物学では外乱に対する生態系の強さや回復力を指す用語として使用されている。つまり、外圧に対する弾性力・抵抗力を高めることによって、すなわちレジリエンスを向上させることによって、多様化の著しいインバウンド・ツーリズムの変動に対応可能な目的地となることができる。インバウンド・クラスターは、他地域との競合の中で、「イノベーション」を通じて自地域の独自サービス等をアピールし、レジリエンスを向上させる。

2. 研究の目的

本研究は、日本におけるインバウンド・ツーリズムをめぐる目的地(インバウンド・クラスター)の動態をフィールドワークを通じて実証的に明らかにするとともに、外国人観光者への調査を通じて彼らの行動特性を解明する。とくに、目的地がインバウンド・ツーリズムに対応するための「イノベーション」、および観光地域として持続的発展を目指すために必要な「レジリエンス」に注目して分析する。これらの実証的な研究を通じて、さらには内外の観光地理学に関する研究動向の検討という理論的な研究を通じて、日本におけるインバウンド・ツーリズムの地域的構造を明らかにするものである。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、具体的に解明する諸点は次の通りである。

1) 外国人観光者の行動変化と目的地変化の解明

観光庁や日本政府観光局(JNTO)、法務省入出国資料に加えて、日本での外国人観光用のスマホアプリがまとめたデータなどに基づいて、日本におけるインバウンド・ツーリズムの空間的発展にみられる特徴を解明する。とくに、行き先の地域的変化を明らかにする。

2) 特定のインバウンド・クラスターにおけるインバウンド・ツーリズムの特性解明

外国人観光者の訪問が卓越する地域、すなわちインバウンド・クラスターにおいてフィールドワークを実施し、インバウンド・クラスターとしての地域的性格を把握する。さらに、クラスターに関係する主体の分析、その地域の地理的な条件を考慮して、イノベーションの存在・可能性、レジリエンス向上の可能性を検討する。

3) 外国人観光者の行動パターンの解明

まず、特定の出身国・地域の外国人観光者に特徴的な行動パターンを、インタビュー調査を通じて明らかにする。スキー、登山、買い物、会議、宗教などの特定の観光について、それらの地域的展開を統計資料や文献等を利用して解明し、さらに国土の地理的条件などと関連づけて考察する。

4) 日本におけるインバウンド・ツーリズムの地域的構造の検討

上記3つの解明された諸点を整理することによって、インバウンド・ツーリズムの地域的構造を検討する。どのようなイノベーションやレジリエンスを備えたインバウンド・クラスターが、国土にどのように分布しているのか、特定の行動や特定の出発地を考慮するとその分布はどのように異なるのか、といった地域的構造を、外国人観光者の移動パターンとも関連づけて考える。さらに、日本人の国内観光にみられる地域的構造や、日本の地理的条件を考慮して、インバウンド・ツーリズムの地域的構造を説明する。

4. 研究成果

1) インバウンド・ツーリズムの空間的拡大と地域的構造

インバウンド・ツーリズムの空間的拡大には、集中と分散という2つの側面がある。従来の「ゴールデン・ルート(東京・大阪間)」では、滞在時間が比較的長い東京や大阪、京都などの「観光拠点都市」が存在する。ここでは観光者の集中が顕著である。同時に、それに準ずる札幌と高山という「地方拠点都市」がみられる。

一方、より滞在時間の短い「日帰り観光都市」(浦安、奈良)と、さらに短い「短時間観光都市」(小田原、御殿場、日光、廿日市)がみられる構造が示された。こうした点では地方レベルや国土レベルで分散がみられる。分散の傾向はゲートウェイからも説明される。まず東京への集中が生じたが、ゴールデン・ルートの形成とともに多極化の性格が強まり、さらに国籍の多様化が生ずると同時にゲートウェイは多様化し、結果的に目的地は分散している。

2) インバウンド・クラスターと行動の特性

外国人の日本での行動は多様化・複雑化している。外国人が好む目的地は、日本人と共通する場合もある。東京や京都などの大都市はその例であり、箱根のような温泉地や白川郷、富士山も同様である。箱根や白川郷では、外国人向けのサービスの多くは日本人が担っており、景観変化も顕著ではない。

しかし、日本人観光者があまり注目しない場所に外国人旅行者が注目する例も多い。自然景観が豊富な中山道を踏破する行動や、ニセコのスキーリゾートでの滞在がそれに該当する。両者ともにインバウンド・クラスターでのイノベーションの多くは外国人によってもたらされる。それは背景として異なる文化をもった嗜好や行動をそのまま受け入れることが困難であるためである。それゆえ妻籠宿や馬籠宿では外国人への対応が遅れている。

行動という点では、インバウンド・スキーヤーについて分析した。その増加は、一部の大規模スキーリゾートには追い風となって

いる。しかし、ニセコでは、日常生活と変わらないある程度の広い居住空間を有する宿泊施設であるアパートメントなどが急激に増加している。これは、これまで日本にはほとんどみられなかったもので、外国人スキーヤーの需要に応じて急増したが、それに関わる主体はほとんどが外国人である。また、外国人を受け入れるスキーリゾートでは、バックカントリー滑降への対応などといった新たな現象・課題が出現している。日本と欧米とで異なる「スキー文化」が作用し、スキーリゾートにさまざまな問題をもたらしている。

すなわち、インバウンド・クラスターの受入環境において果たす旅行ビジネスの役割も重要である。たとえば、大阪と沖縄では韓国系旅行ビジネスが、旅行者の観光体験拡大を後押しし、言語や制度・文化の違いをフォローする役割を持つ。旅行者と観光地とを結びつける媒介機能が重視されるが、小規模であるがゆえに経営が不安定といった課題もある。それゆえに、インバウンド・クラスターには、外国人旅行者に対応したハード面の拡充が求められる。

3) まとめと課題

日本のインバウンド・ツーリズムは量的に発展していると同時に、目的地や行動の側面からみると多様化・複雑化している。こうしたなかで、行動の空間構造やインバウンド・クラスターの共通点や相違点を整理していくこと、さらにはその方法論の確立が求められる。一つの方法はビッグデータの活用であろう。ただし、それに加えて詳細なフィールドワークで個々のインバウンド・クラスターの性格把握を追究することも不可欠である。詳細な調査を通じて、行動の多様化によって実現されていく全国のインバウンド・クラスターの個別化の実態を解明できるように思われる。また、イタリアのベネチアで顕在化しているような、インバウンド・ツーリズム発展による弊害に基づいて、訪問者を規制・減少させるような動きを注視すること求められる。さらに、インバウンド・クラスターのレジリエンスへの注目も重要であり、目的地の持続性をどのように確保するのかを考える必要がある。

グローバルな視点でみると、日本におけるインバウンド・ツーリズムの発展を世界的に捉えることが必要である。日本を除く先進国や発展途上国における状況とは異なり、日本のマス・ツーリズムの担い手は日本人であり、つまり、国内で完結するようなツーリズムが今日までに大きく成長してきた。これは、例えばスペインやインドネシアの例とは大きく異なっている。ところが、現在の日本をめぐるインバウンド・ツーリズムの発展は、国内ツーリズムが成熟した後に短期間に外国人旅行者の大量の受け入れが迫られていることを意味している。また、ほとんどの外国

人が理解できない言語や文化の問題もある。こうした日本のインバウンド・ツーリズムがもつ特異性を考慮しながら研究を進めていくことが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 12 件)

Funck, C., 'Cool Japan' - a hot research topic: tourism geography in Japan, *Tourism Geographies* vol.20(1), 2018, pp.187-189 (査読有)

杜 国慶、ビッグデータに見る訪日旅行者の移動ネットワーク、立教大学観光学部紀要、20、2018、pp.27-39 (査読無)

ジョーンズ トマス、富士山における国際対応のあり方 外国人登山者の管理に関する現状と課題、富士学研究、vol.15、2018 (査読有、印刷中)

呉羽正昭、フンク カロリン、有馬貴之、インバウンド・ツーリズムの発展を地理学で考える、E-journal GEO, vol.12, 2017, pp.329-331 (査読有)

猪股泰広、坂本優紀、呉羽正昭、山下亜紀郎、登山者からみた山岳観光地域「上高地」の意味 - 登山者の来訪特性分析を通じて -、人文地理学研究、vol.37, 2017, pp.19-40 (査読無)

名倉一希、甲斐宗一郎、小泉茜彩子、王汝慈、呉羽正昭、野沢温泉村におけるスキー観光の変容 - インバウンド・ツーリズムの展開に注目して -、地域研究年報、vol.39, 2017, pp.65-89 (査読無)

太田慧、杉本興運、菊地俊夫、土居利光、東京・上野地域における商業集積地の空間特性、観光科学研究、vol.10, 2017, pp.1-8 (査読有)

杜 国慶、APP データに見るインバウンド訪問者の空間構造、立教大学観光学部紀要、vol.19, 2017, pp.14-22 (査読無)

d'Hauteserre, A.-M., Funck, C., Innovation in Island Ecotourism in different contexts: Yakushima (Japan) and Tahiti and its Islands, *Island Studies Journal*, vol.11(1), 2016, pp.227-244 (査読有)

服部陽太、杉本興運、太田 慧、菊地俊夫、箱根・元箱根における観光発展と空間構造、観光科学研究、vol.9, 2016, pp.67-75 (査読有)

市川康夫、羽田 司、松井圭介、日本人・外国人ツーリストの観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光、人文地理学研究、vol.36, 2016, pp.11-28. (査読無)

Jones, T.E., Ohsawa T., Monitoring nature-based tourism trends in Japan's national parks: Mixed messages from domestic and inbound visitors. *IUCN PARKS Journal* vol.22(1), 2016, pp.25-36 (査読有)

〔学会発表〕(計 17 件)

呉羽正昭、日本のスキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズム対応、日本スキー学会第 28 回大会、2018

杜 国慶、ビッグデータにみる東京 23 区の外国人旅行者空間構造、日本地理学会春季学術大会、2018

安 哉宣、沖縄における韓国人旅行者による受け入れ環境への評価、日本地理学会春季学術大会、2018

呉羽正昭、フンク カロリン、有馬貴之、インバウンド・ツーリズムの発展を地理学で考える、日本地理学会秋季学術大会、2017

呉羽正昭、日本のスキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズムの発展 複数リゾートの比較分析、日本地理学会秋季学術大会、2017

フンク カロリン、中国地方におけるインバウンド・ツーリズムの空間的拡大、日本地理学会秋季学術大会、2017

杉本興運・菊地俊夫、知多半島におけるインバウンド観光の現状と課題、日本地理学会秋季学術大会、2017

有馬貴之、箱根における外国人観光客と地域の対応、日本地理学会秋季学術大会、2017

杜 国慶、ビッグデータにみる訪日外国人旅行者の空間構造、日本地理学会秋季学術大会、2017

小島大輔、ゲートウェイからみた日本におけるインバウンド・ツーリズムの時間的・空間的な発展傾向、日本地理学会秋季学術大会、2017

安 哉宣、訪日韓国人旅行者における韓国系旅行ビジネスの役割、日本地理学会秋季学術大会、2017

市川康夫、中山道を歩くインバウンド・ツーリズム 欧米系ツーリストの文化観光への意識に注目して、日本地理学会秋季学術大会、2017

名倉一希、呉羽正昭、甲斐宗一郎、小泉茜彩子、王汝慈、長野県野沢温泉村におけるインバウンド・ツーリズムの展開にともなうスキー観光の変容、日本スキー学会第 27 回大会、2017

Funck, C., Creating a framework to analyze the sustainability of mega-cruise-ship tourism in Japan, *International Geographical Congress*, 2016

菊地俊夫、インバウンドで市場創造 - MICE はビジネスの救世主となるか -、あいち経営フォーラム、2016

Jones, T.E., ZHAO, Y., Diversifying adventure tourism segments: satisfaction and behaviour of international climbers descending from the summit of Mount Fuji in summer

2015, Conference Euro-Asian Tourism Studies Association, 2016
Kojima, D., Changes in the inbound tourist gateways to Japan, IGU Tourism Commission IGU Pre-Congress Symposium, 2016

〔図書〕(計7件)

菊地俊夫、二宮書店、ツーリズムの地理学、2018、224

矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編、朝倉書店、地誌トピックス ローカリゼーション、2018、160

矢ヶ崎典隆ほか編、朝倉書店、地誌トピックス グローバリゼーション(呉羽正昭：グローバル化時代のツーリズム)、2018、pp.90-100

呉羽正昭、二宮書店、スキーリゾートの発展プロセス：日本とオーストリアの比較研究、2017、223

Müller, D.K. and Wiecekowsky, M. (ed), Springer, Tourism in Transition (Funck, C. and Chang, N. Island in transition: tourists, volunteers and migrants attracted by an art-based revitalization project in the Seto Inland Sea, 2017

菊地俊夫、フレグランスジャーナル社、フードツーリズムのすすめ - スローライフを楽しむために -、2016、178

菊地俊夫・松村公明、朝倉書店、文化ツーリズム学、2016、184

6. 研究組織

(1)研究代表者

呉羽 正昭 (KUREHA, Masaaki)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：50263918

(2)研究分担者

フンク カロリン (FUNCK, Carolin)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：70271400

菊地 俊夫 (KIKUCHI, Toshio)

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授

研究者番号：50169827

有馬 貴之 (ARIMA, Takayuki)

帝京大学・経済学部・講師

研究者番号：00610966

松井 圭介 (MATSUI, Keisuke)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：60302353

杜 国慶 (DU, Guoqing)

立教大学・観光学部・教授

研究者番号：40350300

ジョーンズ トーマス (JONES, Thomas)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：50611745

小島 大輔 (KOJIMA, Daisuke)

長崎国際大学・人間社会学部・講師

研究者番号：80551770

安 哉宣 (AN, Jaesun)

静岡英和学院大学短期大学部・現代コミュニケーション学科・准教授

研究者番号：80712314

市川 康夫 (ICHIKAWA, Yasuo)

明治大学・研究・知財戦略機構・日本学術振興会特別研究員

研究者番号：60728244